



# 竹林の風

## 緊急事態宣言下の夏休み明け

警戒度レベルステージ4「緊急事態宣言」が発令される中、管内学校においては夏休み明けとなりましたが、宣言はさらに9月30日まで期間延長されることとなりました。新型コロナウイルスの感染拡大状況がこれまで最大であることから各学校では行事等のもち方で新たな決断が迫られていることと、思います。「これまで頑張ってきた児童生徒のために、教職員のために何とか開催してあげたい、実施してあげたい。」の観点と「児童生徒の命を守ることが最優先」の観点とで、どちらに舵を取るのか悩ましいところだと思われま。なぜならば、どちらも判断軸が「児童生徒のために」だからだと思われま。

教育事務所でも状況は同じで、研修会や訪問のもち方について毎日議論を重ねています。感情としては「子供のために、教職員のために、学校のために開催・実施」ですが、変異株の感染力の強さ、児童生徒の予防接種の状況を踏まえるならば、やはり「命を守る」ことを最優先とし、苦しい決断をしているところ。今月も、上三川町教育委員会と宇都宮市教育委員会との連携のもと、管内児童生徒が生き生きと学び遅く成長していけるよう、教育行政活動を推進して参りたいと思われま。

## パラリンピック東京大会から感じたこと スクールサポーター 伊澤 栄一

熱戦が繰り広げられたパラリンピック東京大会が、先日閉会しました。新型コロナウイルス感染拡大が収まらず、大会前には、開催することに批判もありました。無観客など異例づくしの大会となりましたが、日本選手団は、金メダル13個を含む史上2位のメダル総数51個と奮闘しました。また、各競技会場では、様々な障害を抱えたパラアスリートたちが、競技にひたむきに向き合う姿を通して、違いを認め合う共生の意義を伝えるとともに、50代以上の選手たちは、人生100年時代を迎え、年齢に関係なく頑張れるというメッセージも発信してくれました。選手たちの活躍は、我々に勇気や活力を与えてくれましたし、メダルの有無に関わらず、自己ベストの更新や残された機能を最大限に生かして自分に合ったやり方でプレーする姿に自分が励ましてもらっているようでした。



車いすテニス女子ダブルスには、本県出身の大谷桃子選手が出場し、銅メダルを獲得しました。高校時代に、テニスでインターハイに出場した大谷選手は、高校卒業後に病気を発症し車いす生活となりました。テニス選手として全国的に活躍していた大谷選手が障害を理解し、車いす生活を受け入れるまでには紆余曲折があったことでしょう。車いすです日常生活を送るだけでも大きな変化で、競技生活を続けるには、相当な忍耐や努力が求められたことでしょう。それらを乗り越えて、パラリンピックの舞台上で車いすを自由自在に操り、コート内を走り回り、コート内に打たれたどんなボールも粘り強く返球する姿は金メダル級のものでした。



教育現場では、障害の有無に関わらず、子供たちが共に学校生活を送るインクルーシブ教育が推進されています。特別支援学校と小学校、中学校、高等学校との学校間交流や障害を持った児童生徒の居住地の小学校や中学校との居住地校交流が行われています。一緒に学んだり、遊んだりする中で、子供たちが互いに認め合いながら成長していくことを目指しています。交流を通して互いに尊重し合う心が育ってほしいと思われま。

来年、本県で全国障害者スポーツ大会「いちご一会とちぎ大会」が開催されます。パラリンピック東京大会の盛り上がりが続いてほしいと願われま。しかし、障害者スポーツの練習場所や指導者の数は、まだ十分とは言えないよう。国籍や人種、性別、年代が異なるように、障害の有無は特別なことではありません。『障害は個性』、ただハンディキャップがあるので支援が必要なだけなのです。障害者スポーツを志す人が適切な支援を受けられ、障害を理由にスポーツを諦めることのない世の中になってほしいと願ってやみません。「いちご一会とちぎ大会」で、選手の皆さんの活躍する姿が見られることを楽しみにしています。

教職員一人一人の誇りと品格は 教育への信頼を確たるものにする

## 令和4年度 文部科学省概算要求の内容から



すでに御覧になっている方も多いと思いますが、8月末日、文部科学省が令和4年度に向けた「概算要求」を公表しました。これから年末にかけて財務省との折衝が続きますが、文部科学省の要望どおりに進むことは困難であるということも想定しながら、『国が示す教育の方向性という観点』で考えてみたいと思われま。

公表データ「概算要求のポイント」の中で「新しい時代の学びの環境整備」という要望資料に着目してみました。小学校の内容2点です。

1点目は、小学校高学年の教科担任制を推進するための+2,000人の定数改善要求です。目的は、「専門性の高い教科指導の実現」と「教員の持ちコマ数軽減による働き方改革の推進」です。これは、令和3年1月26日の中教審答申【「令和の日本型学校教育」の構築を目指して】を受けた要望となっています。気になる定数改善ですが、具体的には、加配の増員ということになります。今回は、小学校専科加配の増員として要望されています。また、優先的に専科指導の対象とすべき教科として「外国語、理科、算数、体育」も示されました。教科担任制への動きが具体化することが想定されます。

小学校専科加配ですが、令和2年度と3年度の2年間は、既存の学力向上実践加配から小学校専科加配への発展的な見直し、いわゆる増員せずに振替をするという作業でしたが、今回は純増要望となっております。今後の文部科学省の頑張りに期待したいと思われま。

そして2点目は、「少人数によるきめ細かな指導体制整備」です。具体的には、法改正による小学校第6学年までの35人以下学級編制実施のための教員増員の要望です。令和4年度は小学校第3学年が法的に35人以下学級編制となりますが、既存の加配の一部振替の記載が気になる点です。

さて、御案内のとおり、栃木県は国の施策よりも先に、独自の少人数学級として、令和2年度をもって小学校第6学年までの35人以下学級編制を実現させております。小学校第3学年以上の35人以下学級編制においては、必要な教員を既存の加配の振替と県単独予算措置により対応しているところ。では、国の状況は本県へどのように影響するのか……、

となるわけですが、国に対しては、これまでの加配数の維持そして増員、また、県単措置分に対しても数の維持に努めていかなくてはならないと考えております。教員の資質の向上と共に、マンパワーとしての数も重要です。子供たちの健やかな成長のために、延いてはとちぎの未来のために、今が踏ん張り時であると思われま。

学校現場から遠く離れた国の話題と感ずるかもしれませんが、施策は必ず学校にかかわってきます。国の動きを大きく捉えて教育の流れを確認し、今後の動向を注視しながら、それぞれのお立場で業務に生かしたり、学校の研究課題などに反映させたりなど、参考にさせていただければと思われま。

## 少々、お待ちいただけますか？



所用で、管内のある学校にお電話を差し上げ、お取り次ぎをお願いした時の話題です。ほとんどの場合「少々お待ち下さい。」と御対応されると思われま。もちろん、ビジネスマナー的にも適切です。その時は「少々お待ちいただけますか？」とご案内されました。ちょっとした確認作業というのでしょうか…、コミュニケーションが生まれたことに、私は緊張がほぐれ、とても心が和み、素敵な対応に感動しました。(お電話をした私の心持ちにもよると思われまので、あくまでも「個人の感想」ということにはなりますが……。)

お電話は、顔を合わせていない分『心の声が聴こえる』とも言われま。表情、姿は見えないけれど、今、どのような気持ちで相手と向き合っているか、対面よりも分かるということ。今回の経験で私は、なんて細やかな心遣いなのだろう、なんて温かな職場なのだろうと感じた次第です。

さて、電話対応とまではいきませんが、コロナ禍での日常のマスク装着を振り返ると、どうしても表情が伝わりにくいという状況が続いていると思われま。その分、少しだけ言葉を加えたり、相手方の状況を考えたりしながら、しっかりコミュニケーションをとっていききたいものです。